

—《書評》—

久保亨著 岩波書店

『日本で生まれた中国国歌——「義勇軍行進曲」の時代』

(東京大学社会科学研究所助教) 河野 正

1. 本書の内容

本書はシリーズ「日本の中の世界史」(全7冊)の1冊である。「刊行にあたって」によれば、本シリーズは「自本国位的な政治姿勢が極端に強まるなかで、「日本の中に「世界史」を「発見」すること」で、「自本国位的政治姿勢が世界的な動きの一部であることを認識するとともに、それに抗する動きも、世界的関連の中で日本のうちに見出すこと」を意図している。そのなかで本書は、国家の象徴ともいえる国歌、ここでは中国国歌の成立を、当該時期の日中関係の下で読み解いている。

本書の内容に入る前に前提として、中国国歌について簡潔に説明したい。中国の国歌「義勇軍行進曲（原題「義勇軍進行曲」）」は、1935年に公開された映画「嵐の中の若者たち（原題「風雲兒女」）」の挿入歌として作成された。作曲者の聶耳は日本滞在中に本曲を完成させている。

本書で中心となるのが聶耳のほか、当時映画を含めたメディアを取り締まる立場にあった国民党中央・宣伝委員会主任の邵元冲およびその妻・張默君の3人である。彼等は「日本」を通じて様々な共通点を有していた。このなかで本書は特に聶耳について、従来の親共産党的な立場が強調されがちな叙述に対して、「普通の若者」としての側面を重視するという方針を探っている。以下、本書の内容を簡潔に見てみたい。

本書はプロローグ・エピローグの他、4章からなる。第1章では清末から中華民国初期の状況が論じられる。清朝政府は日本モデルの近代化を模索しており、日本留学がブームとなっていたほか、中国国内の教育機関には多数の日本人教員が在籍

していた。邵もこの時期に日本へ留学していたし、張が在籍した上海の女学校は、創設者が下田歌子と交流があり、日本人教員も在籍していた。

彼等2人より若い世代にあたる聶耳は1912年2月に雲南省・昆明で生まれた。この時期の昆明も日本、そして国際社会と不可分である。当時の昆明は国際市場のなかで経済成長を遂げ発展してきた。聶耳の兄も日本で仕事をした経験があったし、昆明には日本語と日本の教科書を使って近代知識を学ぶ学堂なども設立されていた。昆明からは多くの人材が日本へ留学しており、辛亥革命後の革命政権を担ったのもそのような人々だった。

中国における「日本」をとりまくこのような状況は、民国成立前後から変わり始める。これは欧米列強から中国への資金提供などにより日本の地位が相対化されたことなどによる。こうして欧米留学への関心が高まり、日本留学の割合も相対的に低下していった。

第2章で扱う時期、即ち1910年代後半から1920年代半ばにかけてこの傾向は加速し、中国は日本式の近代化モデルとは決別し、ソ連を意識しながら独自の路線を模索するようになった。この時期には欧米の様々な思想が流入するとともに、第一次世界大戦による西欧通貨の下落や労働者不足により、欧米への留学や就労が容易になっていった。

邵自身もこのなかで欧米留学に向かう。また孫文らはソ連へ接近を進め、ソ連の援助で黄埔軍官学校の設立や国民党・共産党の接近が進められた。邵も欧州からの帰国後、黄埔軍官学校で政治教育を担当することになる。

日中関係に話を戻すと、このような状況に加え、第一次世界大戦中には日本による山東占領や二二ヵ条要求のために、中国の人々の日本に対する反発が高まっていった。日本側でも国民党の北伐への反発が起り、日中関係に新たな緊張関係が生まれつつあった。とは言えこの時期にも日本との連携に対する期待感も存在し続けており、邵自身

も日本とのつながりを維持していた。

雲南省はこの時期、経済力・軍事力を背景に北京政府と対峙する立場を探っていた。聶はそのように全体的に進歩的な政権の下で過ごしたこと、外の世界や社会変革に興味を持った。翌年すぐ帰郷することになるが、1928年には国民革命軍に身を投じることを決め、家出を敢行している。

続いて第3章で扱う1920年代末には、国民政府によって対等な日中関係が模索されるようになる。この時期の日中関係は、当初は山東出兵などを理由に悪化の一途をたどった。しかし邵はその間にも、経済面などで日本に言及し続けていたし、上海の内山書店などで日本語を通じて社会主义研究に関する書籍を読むなどしていた。

日中関係自体はこの後、幣原外交下での日中関税協定・中国の関税自主権回復を背景に改善の兆しが見られる。まさにこの時期、1930年7月に上海へ出てきた聶は、国民革命軍参加によって中断していた日本語学習を再開する。

そして本書の最後を飾る第4章では、満洲事変が勃発し、「嵐の中の若者たち」が作成された1930年代の状況を描く。1931年の満洲事変以降、国民政府は外交的解決を模索するが、これに対して聶などの若者が反発を見せていた。

他方この時期には、中国国内で日本への関心が高まるという面もあった。その結果、1932年以降、日本留学が再び増加に転じる。聶が「義勇軍進行曲」完成の際、日本留学中だったのも、このような背景があった。また、「嵐の中の若者たち」が当時の中国で上映された経緯を考えても、やはり日本との関係が意味を持つ。この時期、中国で上映される映画などの審査を担っていたうちの1人が、宣伝委員会主任だった邵である。この時期の邵は、聶などと同様に、国民政府の対日譲歩に批判的な立場を採り、不満を持っていた。

この時期の国民党による映画政策自体は、1933年末以降左翼系映画への規制が強化されたほか、

日本に対する譲歩のなかで、抗日宣伝などへの規制が強められていた。他方で、邵の宣伝委員会主任在任中には日本への対抗という側面からソ連との文化交流の強化などが見られ、中国におけるソ連映画上映や中国の左翼映画人の作品がソ連の映画祭で賞を受けるなど、左翼文芸を取り巻く状況に変化が生じていた。即ち、「嵐の中の若者たち」のような左翼的抗日映画の上映が許可された背景には、このような社会的状況が存在していた。

本書における3人のアクター、特に聶と邵の人生が、日本をキーワードにここで重なる。即ち、「義勇軍進行曲」が作成され世に出た背景には、紆余曲折の日中関係のなかで、日本に関心を持ち続けた聶と、同じく日本に関心を持ちつつも満洲事変以降日本との協調という考えを棄て、国民党の対日譲歩によるメディア規制に不満を持った邵という2人の存在があったのである。

2. 本書の意義

このように内容に富む本書の特徴は、「義勇軍進行曲」の作曲家である聶だけでなく、国民党政府側のメディア政策担当者である邵やその妻を取り巻く社会を「日中関係」という枠組みのなかで描いたことだろう。本書のこのような姿勢は、それぞれのアクターを「特殊な人々」として扱うのではなく、例えば聶を「革命運動に献身した」という文脈ではなく「普通の若者」として位置付ける（2頁）ことで、当時の社会の全体像を捉えようとするところからも見られる。

ところで、聶の位置付けをめぐっては、岡崎雄児による本書の書評で、批判的問いかけがされている。それを端的に示せば、本書が描こうとする聶の「普通の若者」としての側面は、岡崎自身の著書などによって既に明らかにされており、改めての課題設定は不要、というものである⁽¹⁾。

これに対し、評者なりに本書を消化した上で本書の意義を示せば、聶個人に注目するだけでなく、聶のような「普通の若者」が生きた当時の中国社

会全体のなかで聶自身や「義勇軍行進曲」をめぐる状況を位置づけたことだと言えるだろう。

しかし、本書の意義を考えるうえで、やはり聶の位置付けについて整理が必要かと思われる。そこで本書評では、岡崎による批判とは異なる方向から聶の位置付けについて考え、評に代えたい。

評者がここで検討したいことは聶の左派知識人としての位置付けである。即ち、本書では聶が1930年時点で共産党に入党していないことに言及されるのみで、聶と共産党の距離感についてはあまり明確にされていない。しかし岡崎によると、聶耳は1933年に入党している⁽²⁾。また、本書では聶の日本行きの動機について、日本への興味や、そもそも日本留学という意思自体を持っていたことが強調されるが、岡崎は明確に「亡命」という言葉で説明している⁽³⁾。即ち、田漢の逮捕など、1935年に国民党政権からの左派運動への弾圧が強まり、自分の逮捕が目前に迫ったため、それから逃れるために日本を目指したことが指摘されている。

これは岡崎が根拠とする聶耳の日記⁽⁴⁾にも、自分が間もなく逮捕されるという情報を聞いたため、日本行きを決心したことが記されている。なお日記自体には「青天の霹靂だ！」と書かれているのみで、日本行きの明確な理由は記されていないが、于伶の説明を引く形で、「青天の霹靂」が自分の逮捕に関する情報を聞いたことを指すということが、注で示されている。

この日記が4月1日のものであり、その後、未完成の「義勇軍行進曲」を抱えたまま同月15日には出国しているという急展開を考えると、やはり聶の日本行きには亡命的側面も強かったのではないだろうか。この際岡崎は、聶が党に援助を頼んだことを推測している⁽⁵⁾。仮にそうであるならば、聶は党员のなかでも党组织との関係が強い人間であり、そのような立場ゆえのやむにやまれぬ日本行きだったと言えるだろう。

無論、聶は以前から日本語を学習していたし、日本行きを考えていたのも事実である。そのため筆者の言うように、他国ではなく日本を目指したというのは、予てからの日本に行きたいという痛切な思い無しに説明できるものではない。

また、聶に左派知識人という側面だけでなく、「普通の若者」としての側面が存在していたことも当然重要であり、聶の「革命的」側面ばかりを過度に強調するべきではない。とは言え、聶という人間自身、普通の若者でありながら左派知識人としての活動や交友関係を持っていた。聶を取り巻く当時の環境、ひいては社会もそのような人々によって作られていたのではないだろうか。

聶、邵、張など、個人を通じて当時の社会や日中関係を俯瞰する本書の意義は多方面にわたるだろう。冒頭で紹介した本シリーズの目的に立ち返るならば、研究者のみならず、多く一般の読者が本書を手に取り、国際関係のなかで本書で描かれる「時代」を感じされることを期待したい。

(2019年2月刊、244ページ、本体2,400円+税)

[注]

- (1)岡崎雄兒「『義勇軍行進曲』の時代を重層的に——作曲者・聶耳の人物像をめぐって」『東方』第463号、2019年、35~39頁。
- (2)岡崎雄兒『歌で革命に挑んだ男——中国国歌作曲者・聶耳と日本』新評論、2015年、126頁。
- (3)岡崎前掲書、特に第4章。
- (4)聶耳全集編輯委員会編『聶耳全集 増訂版』中巻、文化芸術出版社、2011年、563頁。
- (5)岡崎が論拠としているのは、夏衍が後に「上海の党组织が聶を国外に脱出させる費用を出すくらいの力は備えていた」と語ったという点であり、これが実現したのか否かは定かでない。岡崎前掲書、175頁。